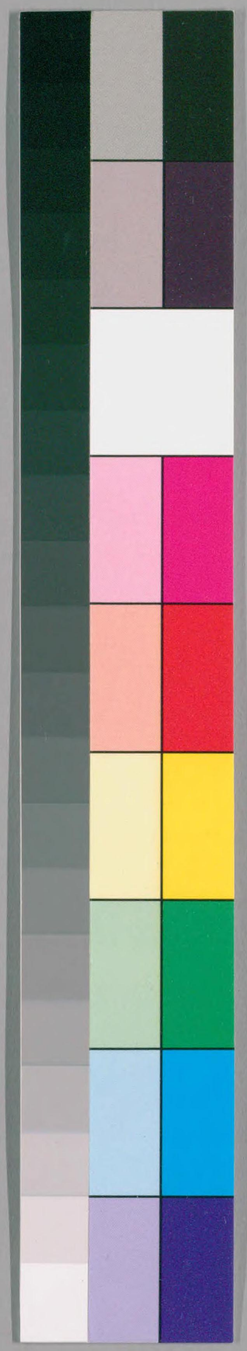
WB 2
4



国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4

ガラス使用

因果物語巻之二目録

一 妬て殺せし女主の女系をとり殺す事
二 人は金がしたる儒死して早責せられ変
三 金は独人をのうして蛇に成ることなり
四 半蛇蛇を生ずれ事して代と死すべき事
五 且那の戸を争ひたる老狂気せしなる事
六 女の亡灵長老と回答をしすり
七 悪食ばかりな人死してらに成ることなり
八 乞食を切すかしていたひ事
九 盲目死して福人の子に生れし変
十 無くて往生の日は知らぬ事

WB2
4
57. 2. 26
82W10212
アカキ
国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

十一 師乃亦死して後妻子をとらせます
十二 ふるき川を始めしずやうりし事
十三 会佛者の指より仏像乃あり事
十四 人の母ほうもそこに如きの事
十五 学者乃僧あるに女と取りし事
十六 母乃歯昊三年の子は生立し事
十七 仏ほうとわしくすめて罰わたりします
十八 施物を私にし罰をうしなす事
十九 金を隠し至歯昊は成さく来りし僧のす
廿 人ほうもの女死して亡昊は成さる事
廿一 逆修の喜根は依てく大名の子はすれし事

因果物語巻二

一 妬て殺せし女主の女系をとり殺す事
濃州より或宰人尾州名古屋に行て帰りまる
日暮になりてくり毎に女乃ほうもくしきりは呼かくほうもやらんいま
いぶきくしひそれども却乃やゆる方は立寄て
それぞ足をとらは物してさらはしに立たる人也
ほうもくゆうろしるまそれともいふは辞めしと系を
かけて海は何をぞといへぞ我は山下乃庄屋の内に
つるれし者也石亀乃妬は女よりて姫子の死を
いたしまり敵をとりはしまらんとゆゆふ様ぐらくは

さい女ばうして終られし所に是ハあやしき
くせ物ありと語(かたる)によりて塚をほりくづさ
しかれバ心やすき事也とて其夜にのぞかれず
ゆうさ(?)めぐみ(?)けりもの見まうさそ終りしが
かくりゆりけ濃州(こうしう)の人とするおかかりちゃくゆく
家の口(くち)にて牛王(ごわう)の札(ふだ)をはりて内に入ざりし
迚(とて)のうちこれをまくりて終られしとふ力およばず
ひろしにものあらうゆきき牛王(ごわう)を破(やぶ)れとちぐされその
かの幽霊(ゆうれい)内(うち)へいりしかバして只今まで女死
七八人かかいて錦車(きくぐるま)とりてありしが
さんげしくは由をかたる夜なかの亡霊(ぼうれい)を寺(じ)へ入(?)此

家に来りもろかりが今ハ常のごとく茶湯(ちやたう)に出して
寺(じ)の和尚(をしやう)に施しこへやう此女中に讃歎(さんたん)を
とりて今ハ三十四五歳の(?)うかうしき代の
ぐ趣(?)ほうつまち懇(ねんごろ)ろにせず今よりのちハ
御弟此寺へ籠(こも)りありしのち此わかき人時女中
四月まで此幽霊(ゆうれい)をしりしもとてわかきけ
しうくにそりはくハ左様(さう)や此女家(?)儀(ぎ)にも申
く第(?)もかハこの女の歎(なげき)て送りとせ中幽霊(ゆうれい)を
委(くは)しく語りけれバかの亡霊(ぼうれい)ハ左様(やう)やうのも也
女房あつく弔(とふら)ひもろかりが其後有馬(ありま)へ湯治(たうぢ)しける
留守(るす)に下男(げなん)を招(まね)き門向(むかひ)に植(うゑ)し井(い)のもとのこ

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

けるなり彼女成すりし和し井乃たるに志より
たる井なれども水よくすみて人親のわりくと
こゆるかといへば彼女立より角のぐるけり而は
ゆうさ海につきくめてこゝろし世りハ方をなぞる
里と彼君しをりこゝ夜より亡灵と形りてゝり
亦乃流りに来り此うさ海にたちて人にハみて
そりこ来成君たる人ハ化物をとくゆそれ河法
せしかどに日くれより去りしかのもさ来也
かの所やをるに居なる成龍柳を立くつをれ其
力を投て死なるハをのまゝが恩痴乃拝よりて
これこゆとろこもせ沢二七日湯にへて帰りしとも

寛永廿八年八月乃中也是ハ江戸にてさゝつ大名
の家中に志よ用るゆへ濃列乃彼宰人来
りて恵にたり侍ろり海ことにゆうろしき
まゝ也もろうしにても北国にしろされたる女
幽灵ゆゑりてこゝみをなさぜし中にをゝめし
なりしといへどもまさしく目乃家に
かゝる中を見るまつけてさよこし海なる
まゝにハ形すむひありとつゝ中ハよく
いつりにわらずゆそれてもゆそりしとも
まし

二人は金をしたゝ御死して早夜は年中
相引小田原より高木伝へし殿西住乃此は金田と
いふ木乃近木は真言宗乃僧わりかの家の祖父
正光評の此月忌日より斎はまつ事ばし上がたく
せつゆゑ其しはその日第しまつ次二日過ぎ来り為
はさつしやう御斎をますれてさつしざるはゆるす
世にめづらしき事侍へり是ゆゑは不気いるをし
こゝ者は近き村は茅庵を出すくすむ坊立此死と、
とし侍へり日此ハ金がもちたらやうに沙汰をしが
只金子をおひとつなりでゆゑしたく返りなひ
て葬礼いたせしか一周忌乃時なかの村乃庄や金不へ

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

のしきるかは枝は呻の迷昊いろうも疲衰へよろしく
こしてわかみ来るたよゆゑろきてうろ不は跡
より長一丈計も男様を持来りの坊主をとらへ
は様はとらみて押うもそて黄ようゆうつしさいふ
こうりかく花や肝をかし面を伏て居るかがん
かうかくゆりひて面をわぎてこれぞ男は形し
余主はみよろしくとわ母みまる花や問かるやう
こうかなてもいる女罷隙うしより為うるか黄をとぞ
うもらるしこいつぞ余主なくしゆけるは我死し
て後絶を弔ものなきなは一日一夜は六さびつて
黄をうしをてつるし也我金すうしかしきるを

旦那は金子の女を借をさしより又寺屋敷の姉の
本の手は壷う入鮑の貝を蓋にして蓋より足を
もつてわが跡をとつらひて語られもしかの旦那金
はかしずとゆううりに悩ぬせうごをうせやすへしと
なくくうりてきえくとうせにかり花や以そ
ぎゆりて寺の旦那方へ出らし委しくかうりを
まづ金うるとしうるものはめ女をとく此人おしかり
本の根はうづこけな金ゆもかりおしすなるら
一七日のゆひご絶をよみ今洞はでとつらひわり
むるなは御歌うすいうごるましこうさしまけるか
とも也かくまつ形さまし也

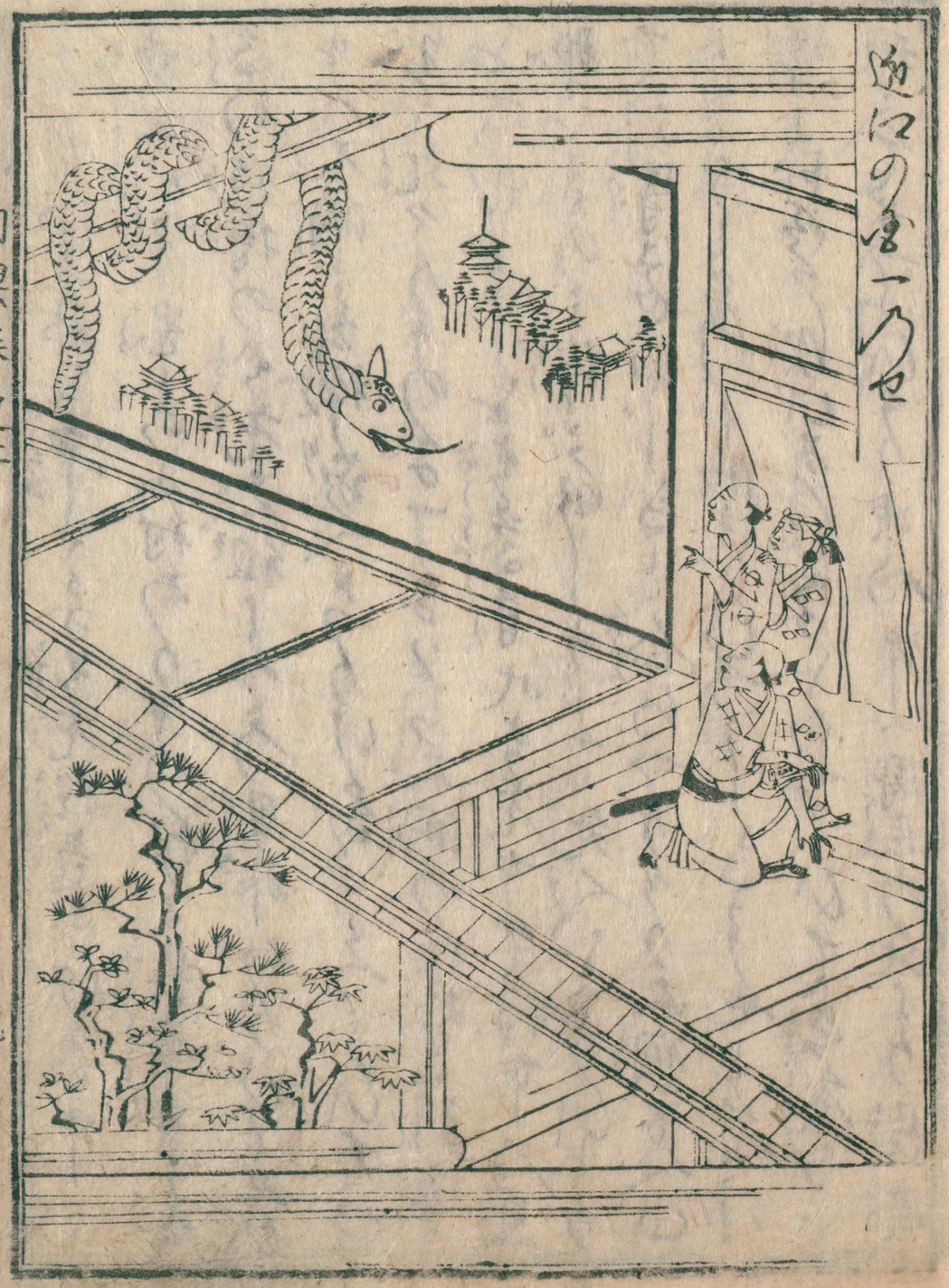
三　人金ゆゑ主人をころして蛇の報をうくる事

むかし小田原の國寺の住持の僧死して後に
大きなる蛇来りて寺の内にある大棟にすみける弟子とも
此蛇をころし捨てるにみなむかしの主の蛇なる
事をしらずして其後夜の夢にきたりてかの
わかき人に此ほど此蛇をころしたるは先住の
僧なり此ほど海にて棟木の金をかくしをかれ
けるゆへに其報にてつゐに蛇となりぬと
されば業の重き事金銀を合せし細工の
うへにても有とて金銀にまよひ
ひとへに蛇となり給ふはまことに高く悲しき事の内なり

内田又左衛門といふ者あり
年ころ銀数をためおきて後に死しける時
近江の國にて山の宿より…浦の…
あきなひをして浦生寺にて…世に有し十年
ばかり…の年…一の瀬と…といふ
の縁ありて…の瀬に…にて…
の縁を…とおもひて…
さらし…やしなはれ…
まことにありとて…
…酒をのみて…
…酔死して其人のもとの寺の

後深さて年金家は炮と成しより年号は連様居と云
禅宮の也山家しき所并は左衛門と成さ又は命と云
もの住かりあるが時に此又は命は山へ行て酒は砕
て海の道にてぞくしてしてまづしひつき気遠れ
やうに明り我は更泉系也と名のり所にくしかと
といふ又衛の様にしたがう地と成さ居たり子は
山地とよう串にして撫まとも明る日は又
りものとくなり地来りし多居たり又は命は大に
咽を乾りしかるしみつは并は死す其の子は也
又は命といふこれも土山より酒は砕て海るとて
中や此とくはまづしひつきたるしみうるしめ

衛の内は禿来りて行かれ三面これをとさきかを
ぜ和へ行をこれぞ三間計形る地と成さ小ぜひ
しかくかくのごとくにして後つ并は我は更泉
系也と名のり所にくしかと成いつく死なりこと
子は此ぞ清三ことそいひ名慶安元年卯月乃初
よりは土山より酒は砕て海るとて来たとく
ぞうぞ行て咽りさきて名をのしかぞり
形し腹乃中もかなしとくしかのわたるしやとて
やがて目つぶれ腰めも面也山家は山伏を形を
さ海く祈禱す也ともすこしを云るし形し更
泉系をたちを行りして衛の中は本来る成追



おそぐ寛よりおくりしとそれぞ大形なる地なりけり
けてゆけぐ交泉茶が塚の卵塔の中へ入れり
あまりはせん方明く丑此年八月七日は平秀和
尚と粒えてとふらひしそのの日の若くこより
咽のうえる心なり一夜日とふらひけるか不ようし
みもとゞまり平接すゆりしき九日ハ血脈と
そこゝめく卒都婆とうるかの面まつくし
卵塔にして血脈をゆさめくやうしまうこゝは
夜の目もあはしかはなりぬけれ
すると平後し給へり

迎口の僧一乃せ

ガラス使用

五 旦那と争しける長老狂気となりける事

東三河(ひがしみかは)豊(とう)と云村あり其村に長慶寺(ちやうけいじ)と云
る寺の住持(ぢうぢ)の長老(ちやうらう)先祖(せんぞ)より旦那(だんな)ありけるが四八
きん大洞(だいとう)と云禅家(ぜんけ)へよりけるがついて後
程なく死たりそのまゝまいりし大洞の住持に引導(いんだう)
をたのみけるを長慶寺(ちやうけいじ)此長老やがて村中の旦
那どもに棒(ぼう)をもたせて死人(しにん)をうばひとり
て引導(いんだう)させまじきと企(たくみ)ありたり大洞方人さ
らしやしたれどもかくはありしきすまじとて沢
導(だう)はかなはぬ次第にやくなりひて長慶(ちやうけい)寺と
しまさてよふぞいたり次の年一周忌(しうき)の比より長慶

寺の長老狂乱(きやうらん)しておかしく口ばしりて家中旦
那(な)ありつけまく寧(ねい)とつくりをしこかく鉄(てつ)に
人生れくなく発口(ほつこう)し釜(らん)をつくりみて我住
寺をたりけ今は思ふりもろくしあわせ七月の末(すゑ)に
寧(ねい)を破(やぶ)りあてうせを狂ひわりくわ神もみな
めたきすそくらひおくありわり裸(はだか)になり浅ましき
ありさまにそつけするされ死たり寛永十八年
の年也すわれども役はまず人様(さま)の桐(きり)とともにそ
の跡ゆえしかとまつ詮(せん)と次より傍に卒塔婆八大
也ひえありいとして人をそ口あるよりあつ悪
痴(ち)騒動(さうだう)ありて屍(かばね)をゆるそふ生まるるに物にいはあり

今ハ末代なれバ所ようあらんかしは諸宗の愚入
道いつれも旦那をかけそひ尸とうばひ合て宗門の
恥を所しす事ことにあらしなるかな

六 女の亡妻も尼と同答やし申

奥州會津の松澤と云ハ松沢寺と云寺あり
此事の住持ある女人のとふらひに卒都婆をたて
しるなり文字をひとり書ちぐへ今ゆゑ秀可と云
も尼りきなる事なれバ其の旦那どもみないなく
素沢寺の住持を無智なるとて追やしすなりち
なの秀可も尼と住持にすへたり或人の長手斗
うち此卒都婆の亡者朱りて秀可も尼に對

面しすなりち亡者のいはく我此ぞくの中に入て
拝ゑの苦をうつる也しさしよもやらにすへ
とうふ秀可のいはく炎通しりかて炎通に入何也
の不しか獄中わらん亡者のいはく獄中を編ず
なりすなれば祥とみよ秀可のいはく祥則
佛性にてぞそ形し亡者の曰ふ此つをてたまへ
秀可のいはく平室禅定尼その時亡靈きえ
うせしうりそれぞ秀可も尼役入をしなくかし
とうけてやうくにやつる侍へり下歸ある夜この時
やなび秀可も尼とよびやしてゝ今此に弱ひ事
こゝ後世之夜八年正月に五然勘を馬まさ人そのうみ會

津まわりし時は四答を出すまでもなく人の上に来
りきつゝやうく堀に祝ら出し
七瀬貪りの人死してこゝに後さりまし
近江の国越知川といふ所の四国の小次右衛門といふ
りのはきえめくかくまでも形さ瀬貪ちんなりと
読人しろゆびとけしやりまづらひてはぐれく
死なるが第三年にあたるとけるこゝ年来沢て
右衛門といふ名の姿に飼けるが馬の子にまとしあるに
里栗毛のこゝ形なるが白き毛にて文字ありしく
それぞ越知川の河次右衛門とこゝ海くとみえ行べり
護國和尚も行て見ましに文字あざやかなる蛇ず

よくくみまはらうひなしとかたりもひかり
正保四年の事也
八気食と切たりして報なるまし
ゆかし国佐和山名何太来心といふ人の子息に
三十命とて十八をまた何の又右衛門といふ人の子息に
又次に十七を山西人おそびけりくなるく気食に
じらひていひまゝらしゆそのしく月腰もまた次
食り飢てなぐらへんよりは死そうはなきかと問せ
まづ気食こゝへていふやう仰そのしくしふやう
身も形さ世のまにまてあらんよりは死さくしそ
さふ人といふ所にぞ切ようしてそしそんとて刀に

主人のまへにて乞食にあやまりをいひて死させたりき
あるさまをみせしかりければつらにつばきをはき
貧しきものを一つなびをかく死させたるかなみ
変没するかは此因果なるべし二人して切ころし
たりけるに乞食のいふごとく二人ながらその日
よりも狂気のごとく縁気に成りし十日もせぬ
うちに二十ヶ所より又二ヶ所へ又ほつほつとわれ
ところ出てしだいにおほく出来しを手ごとに遂に
よかりし又二ヶ所いたみ出て又二つ三つと切ころし
三十余りに成しと申てそのうち一人もいのち
なき因果也

九 盲目死して福人の子に生れし事

美濃国ち波の郷に開眼院と云禅寺あり此寺に
仏師と云座頭ありて極めて善根者也祇園
那とあるはねがはくは寺の檀那となりて門をも立
たり有て仏師しきりにねがひけるが其の国
守家の郷に大福人の子に生まれおい子生
まれて七日のうちに手をひらかず次
七日めにひらきて見ければ手のうちに濃州ち波
郷開眼院仏師と書きたりける中にも又乃
方より故守人とうつして郷よりいそぎ
座頭を呼びまいらせ遂に見せしと寺の

住持より也年妻細也にくハ有孫乃善ハ癡痛
とれるまうさうひあしとうや相しまつ人を
申されし正保乃初めころ乃年也
十日比より往生の日と知るり年
年列江戸此石町に田上玄かとゝ人ゆくてし此母
そのとし六十にして慶安元年ゆり申旬より
まづらひつきそうまより毎日より三方づゝ行水
とせらるゝすなりら帰依の寺此書町の松久寺
とゝふ寺より祖龍とゝふ儒と呼て繋ぎそり則
其庵と請じ無脈とはさゞき飛名ハ照雲系光と
号をとゝ添はなく所水として残りなし寸六月十四日

申乃さくに死す七とゝ云れぬべし人くく残り
明くはと海づひいたしにくその日ゆゑしかばめ
死とせさびすゐしとゝされしと人ゝ知るに
ゆゑなく六家に明りそりかくて諱世の秋を
その年ハますれたり傍にはけるものどもに
はと海づひのさうづきしてそうまよりハ家りに
禅禅をゆゑ禅にそ正会往生ととむしまたり
宜くより死すべき時日をしる事 隠れ乃 隠世
名ゆゑ也まゝ也と更女人の力にてハ海とはさ
とくの事也私乃そしかるゆゑ浄ゆゑ乃ゆゑし
海すにしたあるゝめたらやまし

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

十一　師の僧死して後弟子を殺す事

ゆきしくに大道寺高雲寺の納所に善金と
いふ僧ありけり住持をば吞悦とぞ申しける　かの
人このとし弟子をとりして弟子にてありし　その
ふるさとかの納所すこやうにまうしけるに年比
何となく心ざしを一人よりたすけそくなう　かの
このむすこいうまでなし此契約はありけりて一人
とふらくゆめみるれば俗にしたがうへきことなり
そくまかりはて惣領も剃髪せられなく吞悦
の吞のうしとを善金の僧のよしをとりのかせて
吞悦とうつもしまいりあくて吞悦十二三年

偏参して侍りけるがひさしからずに善金しきりに
帰りて庵室に說経をすゝめ桐遠くかの弟子
に吞悦をわすれずしてありけるを吞悦いさめを
よりまうけ說道具どもとらせ衣をとらせ
なかばもおもひて一周忌の比よりし
てかの善金が亡霊あらはれて夢まくらにたちて
又しきりて吞悦が頸をしめけるが毎夜也
これをもおそろしくおもひてひとつく
経をよみてとむらひけれどもさらにしるしなく
吞悦やがてはやまひつきてわづらひ
くりかへし僧中に出て善金がことをかたりし

吾等が同はみしていつに吾等よくと呼なり
こゝろさ吾等やしこゝろくさのまゝ没入はし
つ干る死なり高さ手の背子右川の永井吉の
を元相続をし出し實永八年の中也吾等わが
力のたゝめ師と形り親となりし等金が親織と
のこゝ手とりなぐ更にもしらず紙中どもは
とめ次迄にこゝろ姫ぐさしなりしなりやうの
ものハ子ともひ等金うしみといてさ次ともとの
づゝ天地の冥がうもつさ行つゝめ
十二　かゝる川とゆれしず法りし中
さ法大名所の鷲師四秘蔵の鷲それをなを

わきてゆゝるさて弱○なりに川むりひり森
の主けるが山森こゝかの鷲と用りてあるとこの主
目とはなさ次が乃義はしまし入家鷲とすべく
ちはしろこびなりもるにこゝ○川と見いぐし
ゆくも山川と只今ハ何と法しそろそと申しつは
更にゆゝしずわされたて二里まつりて法し
家なのりて御りぬ読人をしりは知るなり也
又今津なく吉村清兵衛と云人松平下野守家
老の時ちはゆゝろる今津乃川とゆれしず向
へしまとあり角て立なり所る山川とこの主て
ゆく山川とは先度ハ何と法りそろんとはなく

思ひ知れども山川と流し出すまでの
ゆがしなし帰れ無ものなりてこえしとりとらく
ましものなりしかくは王覇とらふものこそ物まで
乃軍兵引つまて大河と流し出すは流れざらう
なりとらふなるまでもしは父母は佛教也
十三 念佛者乃指より紹儀乃ありし
江戸御たてこしと喜まるまゝしと云人の母その
年六十ばかりなるがきもあて正直なる人にて
こと父後世を祈ひ日夜をさらず沈珠数とる
さずくりて念佛をしましが珠数乃あらうら
不しきにあり後ろ痛のしきにして漸しは

そらく数ゝ落ちたりなりとこれは諸儀の紹
形なりはあくをさきことにゆりひく念佛中
されしそ乃紹儀はあくそうとみて舎利塔は
ゆきめをかれしなるを無しめは見ちる人此なる
らまたり
十四人の逆とうをてこれに数ゝ年
郡列神名川乃宿りあるを猿人宿をかりて朝
とく立ちりとて西のありそれは立ち立乃西羽織
と造こ甚くもんとするなりしものとを忘れず
それは立ち立乃西羽織也何とて甚ぞといふ程
どもあらうは人は知しきあ神まで甚なるゆく

因果物語 巻二

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

女系と成りたるに東暦山乃学者四人同居
して海道を通りかの酒屋に立よりて酒のことを
と故女系一同見て海をなげして啼なり僧者は
ふしぎはなはひて子細を尋ねしはなのまゝ
なれはそのせうことを重教四人れとりかし三世
なり此四人乃学者此中は古人乃学文なる生二
人まつりとも牛込の泉龍院三光院のなる生
せなかよし忠唐やて慥はなるまゝより又曹洞
宗乃偏系の僧も女は成なりあり又淫ちらふ此も
老族系此時ちと産まて畢丸をかきまとし袈裟
衣血は染りその徳女は成なり殺人多知なり

十六 母乃亡呉三年此ゆる子を生立しまし
純伴乃ゆるなかりしと云人の事難産して子は
生れして母は死なりけり夫より夫ことに乾と此
はせていぶきふしなりけり子三才なりて毎夜
かくのとし夫乃家ゆと夫婦産をなくべくふし
なりを明をとしなくは日比生て居るけの
しく也女系十七才にて死なるなが三年ゆくも其
十七歳乃なるも也子は男子也そ乃子十七八は成
けなるとさくれなる陰母者の比丘尼此ゆる也
こ乃人の家ゆけいてりてまれあるなり見ると
なりしかなしまさ

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

十七 仏法をおしくすゝめて罪おこりす
濃州八屋と云所は實山派の世尾に関悦と云
僧あり教多代人に諸道をさづけ海なり
道をすゝめ文社院の事をも切とり仏像を放却
せさ勢先祖をもこふらひ次をもそ佛は移ゆふ
あり身のみは仏なりしとはかくすゝめ者は程
に心をすゝめ御やまりたるども佛のごとくしひ
邪見放逸なりすゝ中くゆそれても解りあり
おりしかの世尾なりしく世にはまゝ葬礼を入
とて宿をうきかしけり所は火車来りて尸骸を
つかみてゆ身かなこと形にしたる是首を引ちぎり

あのえざまかけをさきなりしかの法をやて信じ
よるか者ども大疫病をうきて死なりその
後は生不乃えどもいざしをつらゝめこりやぶり
けり堂宮を本のごとく建立し行本ども種々
ほこれより数徳に成なり正保二年の事也
十八 施物を私にし罪をうきたるす
寛永年中の中明るは永見寺の納所は懐悦
とふ僧あり信施をもゆそれす放逸無慙也なるかが
何かくことにゆそうしき鬼神二人来りて懐
悦を責ぬと若は見なりこまれゆうこしくゆも
ひく偏系の僧二人を粗そて一所は外なりあるか時

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用

二人の鬼来りて杖をもつて打ちたり二人の僧を同じ
さ毎しけるに鬼の云やう侍の屋を立て杖あつる
なとゝふて立ちたる他に憐悦が腰の骨を打ちたり
たり是ゆゑにつきて日比をくゝ人もちたる金銀
を住持うをかりつゝしかりしかり偏系の僧二人
とり立て草鞋孫とやしをり偏系の僧も俄行
成就をすゞして一人は吐血をもつぐらい一人は痢病す
死ふせしに来つ打ちたる二人なぐ死たり憐悦は十四
五年衝しすず苦痛かぎりなくして死なり
十九金に犯人をし僧幽昊を来りしす
分別案名は佛眼院といふ真言宗の寺なりけ

寺の住持寛永下八年に死去すこと後かの僧は幽昊
若しくは年に来り面藏すたき梶のあるを詠めて
居ります三十日計也かの幽昊とよくくこれは乾の
薄く夜何もあり又正しき時もあり殆ろうあり
人いひをるはいつくけ古梶くまゝなこは打るかつ
いつき成子細あるとして紙と重ぶりてこれは金子
人あありすかゝらは金子ともつくよくくこふらひ
なれはなきよりこゝらひ来らずと仏眼院の楞一回
孫四ゝかたし来たり
廿人とうらしるか女死して亡霊は来たる事
江州佐和山ゝ川地あるしと云人ありしはらひの

下女十八九歳のとき侍奉女ハ中あしきものあり
常ならひ事ハ我死ハ海が首ハ喰ハて黄昏
とのゝしるを今り思ふ事不ハ明の女ハ魚にまづらひ
つきて津井ハ死今り日比ハやしごとく夜ことに
来りて中あしかるし女ハ黄昏ハ年しかぎりなし
家中の者とも出明をとゝして用人すれハ右図
入来りてハ黄なやましもなるに鷹川与次来ハ云
人ゆり彼地獄ハ呪を書て黄し出まづらふ女の首
ハ黄を賛宅の口にまをして武をれハこゝひき
ならぬし身也とて私をとゝぎ守りをとりそれど
そ夜ハ来りて世ゆへり扨ハ此呪ハ是雖しとて右

のとく口こゝをし守りよりけき筋それハ二さひ
来らさりきと慥ハ地獄をかり
廿一 逆俗の善根ハ依て大名の子ハ生れし事
ゆゑし佐和ハ海老江のなまはしと云人あり寛永十
九年後の九月廿五日ハ死せし出今り此人年せ
後世者ハて逆俗ハ善根らくゝ地ゆゑ出ひ行へり
豊年をも建立をしが死して次の年和国にて
又六万石とかた名の子ハ生れ出る也其ハ中ハ
前生の名字名家たりに書付あり このひとハ
勇のかりまありて人くよく知たり是ハ依て
佐和ハ弱年ゆゑし佐和ハ町人たるとく知行へり為

行原のなかにして家に来りてかたりしをまのなかり
ち侍へり

サ二 海なかひ人死して後箕用と立し事

日向六兵衛内より物まうなひいたしをかたる煩付て
箕用と立ゆして死なり主人は不便のことに思ひ
そこしい引負をとも是非なしとて指とさたり
又十日ばかりまつく主人此かしつふ下女まづらひ付
大勢つくロなしつて死人乃名は名のりて秘密
に箕用乃悔をあまずして死しうなかなかなかに
つきくるしにしたつき来るなりとて悵同録硯は
とりしまして箕用し千乗書といふ事は疎活なるが

此に遠ひ次箕用明続に極めかを海ぎるし事なし
今乃抽まうなひすなかちまこ海くとひしかて
悔明なりし此時人くさても後世乃弾きわる事り
なきかしかと問なれば秘き箕用のたかに来りし
事後世此沙汰は無益也とて京にはこりあるに次
すなかちしに下女はまづらひ年後しまり海とに
希代乃事也と日向次右衛門なりしまたりと内裁
六右衛門抽かたり也

サ三 代官死して人まつき勘状を立し事

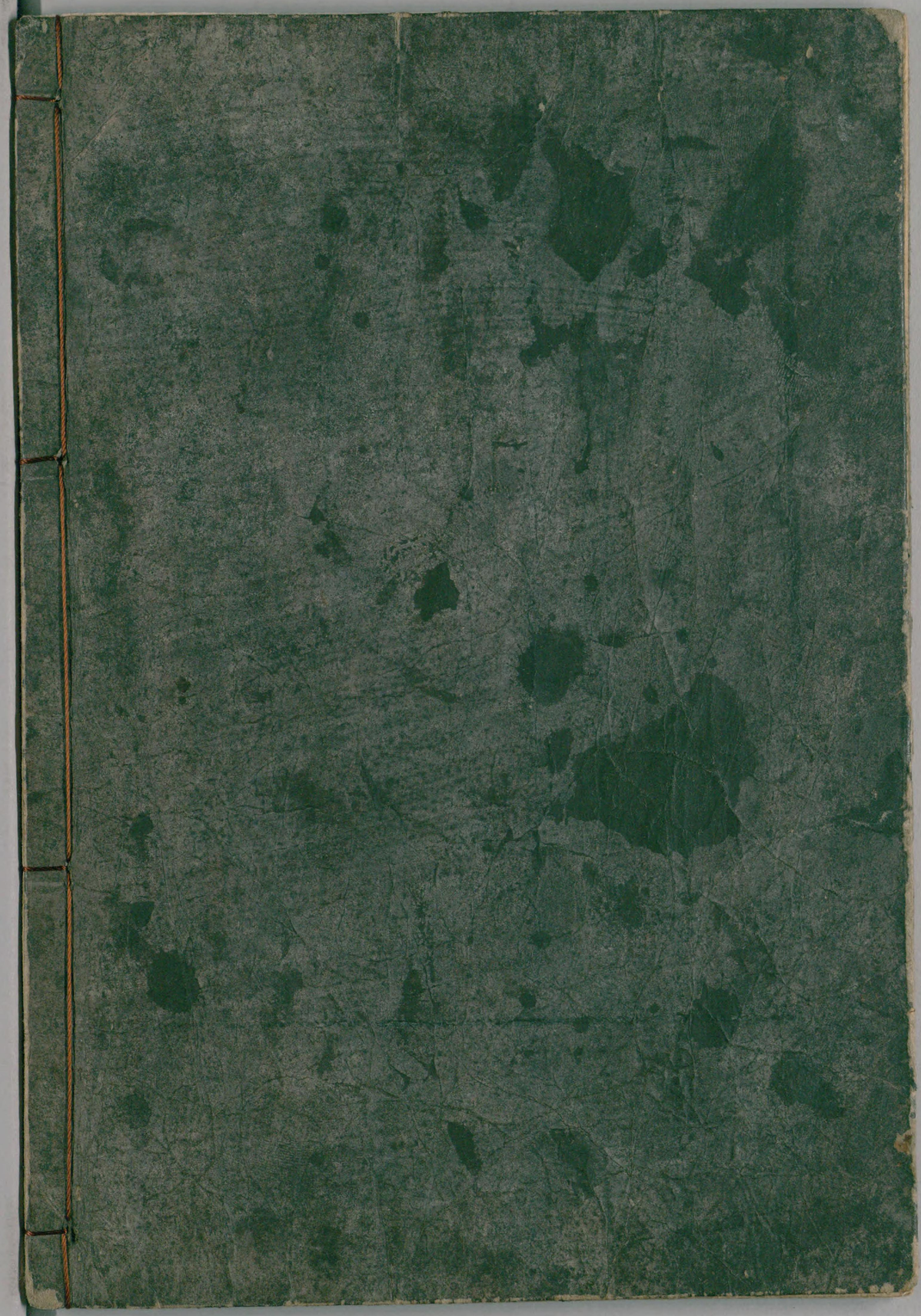
越前国三川守安沛代慶長年中に此年活兵衛
とふ人此代官役いたせし不如不意うまづらひ付

はせよ死なりしなれば下代も箕周をさらむらす
叶ひずそん方ゆくしてさけるに下代なる所より
ほ代ども早速箕周の埒明らしと頻に申されけれ
是は日比より少不部合なりなる也と人々知るなる
う跡式むつしくちまゝ也とおもひしなり也なる
不ほ如の治兵衛しつりひきり女乃母老沖ぬる
とりつきロぞしますなりしほ代ともとよびよ也
日記帳どもを見わたせしくせしなりのしくは
目縁ケ条書をいたすほ跡も無所しと案ずも
遠ふしと所しかくて箕周すなかすすこ三日は寛
給ひり拾ひにちまれ代ほ祝一枚なし是ハ眞是樓

はわきしとふ事案のしくこ重ありすとしを
滞なく埒をおもひ給ひ金子三十枚ありし妻子たちを
こまりて兎もかくも世ばをつる也明日の朝永
平寺より使僧二人来るべきぞ食れ支度をいた
すべしとふそのしく二人の使僧来りけり此
後生はいふと問ひ告しこそ人なりそのまゝ
祝の図ゝ書ひてしなれば此年使を史と云なり
人々会比ゝ知るなれ也

国立国会図書館

国立国会図書館　タイトル『因果物語 6巻』 請求記号 WB2-4
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『因果物語 6巻』　請求記号 WB2-4

ガラス使用